

一八八五年十月二十二日(木)

聖ラーマクリシユナ——イシヤン、サルカル医師、ギリシユ等信者たちと共にシャームプクルの家で楽しく歓談

### 家住期について

アツシン白分十四日目。数日前の白分七日目、八日目、九日目の三日間は大実母のお祭り、マハーマーヤー(ドゥルガー・プージャ)が執り行われた。十日目がヴィジャヤ。信者たちはこの機会に、お互いに親しみを込めて抱擁し、友情、信頼を深め合った。

聖ラーマクリシユナは信者たちと、カルカッタ市内のシャームプクルと呼ばれる地区の邸に住んでいらつしやる。大病を患<sup>わづ</sup>つておられる——喉にガンができたのである。バララームの家に行つておられたとき、ガンガーブラサード先生が診察に来た。タクールは、「この病気は治るのか、治らないのか」とお聞きになった。医者のはつきりした返事ができず、沈黙していた。西洋医たちも、この病気は不治である」と、それとなく暗示した。現在はサルカル先生が治療にあたっている。

今日は一八八五年十月二十二日、木曜日。シャームプクルにある二階建ての屋敷の二階の部屋にベッ

ドがつくってあり、聖ラーマクリシユナはそこに坐っていらつしやる。サルカル先生、イシヤン・チャンドラ・ムコパツダ工氏はじめ、信者たちがベッドのまわりに坐っている。イシヤンは大へんな慈善家で恩給を受けていたが、タクルのためはずっと金を寄付していた。彼は借金してでも寄付を続け、いつも神のことを想っていた。タクルが病気になるれたことを聞いて、お見舞いに駆けつけたのである。医師のサルカル先生は非常に多忙な人のだが、治療のために来て、そのままもう六、七時間もここにいます。彼は最近、きわめて熱心にタクルを敬慕するようになり、まわりにいる信者たちと身内同士のように親しく振る舞っている。

夜の七時ころ、外は月光を浴びて——満月間近のお月様が甘露の水を<sup>あた</sup>送り一面にふりかけているようだ。部屋のなかにはランプががやき、大ぜいの人がいる。大部分はこの大聖者<sup>マハトマ</sup>にお目にかかりに来た人々である。みんな一緒に、タクルの方を凝視している。おつしやることを一言洩<sup>も</sup>らさず聴こう、なさることを一つ残らず拝見しようという気持ちなのだ。イシヤンをごらんになつて聖ラーマクリシユナはおつしやる——

〔無執着で俗世の生活を送る人——無執着になる方法〕

聖ラーマクリシユナ「神の蓮華の御足に対する信仰を胸に抱きながら俗世の生活を送る人は、ほんとに恵まれているんだよ。それに、その人は勇ましい英雄だ！ 頭に二マウンド（70kg）もある大きな荷物をのせて酷<sup>ひど</sup>い道を歩きながら、花婚の行列を眺めているようなものだ。よっぽど力がなければ出

来ないことさ。泥魚が泥の中に住んでいるのに、体に全く泥をつけないようなものだ。水鳥は始終水のなかにもぐっているが、出てきて一度ブルツと羽をふるえば、もう一滴も水がついていない。

だが、そんなふうに世間について俗に染まらず、執着もなく暮らすためには、何ほどか修行が必要だ。いくらかの期間、一人になって暮らすことがどうしても必要だよ。それは都合によつて一年でもいいし、六カ月でも、三カ月でもいいし、一カ月でもいい。そこで人里離れて静かに神について想うことだ。一日中、一生懸命に信仰がもてるように祈ることだ。それから、よくよく自分の心に言いきかせるんだね。『この世に、自分のものと言へる人はひとりもないのだ。自分のものだと言っている人たちも、たつた二日くらいしか保たん！あの至聖さまひとりだけが自分のもの——ほんとの身内なのだ。あの御方こそ私のすべてのすべてなのだ。さあ、どうしたらあの御方をつかまえられるのだろう！』と。信仰を得てから世間の生活をするがいい。ちようと手に油を塗つてキャンタル(ジャックフルーツ)の實を割れば、手にベトベトがつかないようなものだ。世間は水、人の心は牛乳。水の中に牛乳を入れたら、牛乳は水に混ざってしまう。だから牛乳を静かなところにしばらくおいて、凝乳にしなければならぬ。そして、かきまぜてバターをとることだ。バターにしておけば、たとえ水の中に入れても混ざらない。無執着でプカプカ浮いて泳いでいるよ。

いつか、ブラフマ協会の哲学者さんたちがわたしにこう言った——『先生！我々はジャナカ王のようにするつもりです。彼のように、無執着の精神をもつて世俗の生活をします』と。わたしは答ええたよ——『無執着をモットーとしてこの世で暮らすということは、ひどく難しいものだ。口で言った

だけじゃジャナカ王のようにはなれないよ。ジャナカ王は倒立さかたちしたりして、まあどれほど苦行をしたことだろう！ あんた方は倒立などせんでもいいがね、でもある程度の修行はしなけりゃいけない。人気ひとけのない所に住んで、そこで智識ジユニヤナと信愛バクテイを得て、それから世俗の生活に入らなければならぬんだよ。凝乳を作ろうと思ったら、静かなところに牛乳を置いておかなくちゃいけないだろう？ かき回してばかりいたら凝こってこないからね」

ジャナカ王は無執着だったので、一名「ヴィデーハ」と呼ばれている。肉体意識デーハフッテイが無い、という意味だ。世間で暮らしても、生前解脱者ジウヴァン・ムクタ（肉体をもったままで解脱した人）として悠々と歩きまわっていた。しかし、この肉体意識を無くすということは、大部分の人にとってははるか先の先の話だよ！ よほどの修行シュウギョウが要いることだ！

ジャナカ王は大変な豪傑だ。二刀使いをした人だ。一振りジユニヤナは智識、一振りカルマは行為」

〔家住期の叡智と遊行期の叡智〕

「もし、俗世に住んでいる智者と、俗世を捨てた智者がいるとすれば、この二人はどんなふうに違ちがうだろう。答えはこうだ。二人とも同じ品物だ——両方とも智者——一つの品種だ。だが世間に住む智者には「恐れ」がある。女と金のただなかに住んでいれば、何かしら「恐れ」がある。煤すすだらけの部屋に長いこと住んでいれば、どんなに気をつけても、いくらかは体に黒い煤すすがつく。

バターにしても、新しい壺に入れておけばバターは悪くなる機会がない。でももし、バターミルク

(バターを採った後の牛乳の入っていた壺にいられておくとどういふことになるか、ちよつと問題だね(一同笑う)。

いり米を煎<sup>い</sup>つているとき、三粒か四粒、ポンポンと鍋の外にはね出る。その粒はマツリカ(ジャスミン)の花のように白くて、何の汚れもついていない。鍋の中の米もけ<sup>い</sup>つこうな煎<sup>い</sup>り米になつてはいるが、花のように真つ白じゃないだろう、ちよつとは汚れがついていよ。世間を捨てたサンニヤーシンが智識を獲た場合は、ちよつどあのマツリカの花のように一点の汚れもなくなる。智識を得た後で、また世間の鍋にいる人は、ちよつとは体に汚れがつくさ(一同笑う)。

ジャナカ王の宮廷に一人のバイラヴィー(シヴァ信者の女性)が来た。女性を見てジャナカ王は、顔をうつむけ、目をふせるようにしていた。その様子を見たバイラヴィーはこう言った——「まあ、ジャナカ、あなたはまだ女性を見るのが恐ろしいのですか!」完全智に達したなら五つの子供のような性格になつて、もう、女と男を差別する感じはなくなるがね。

世間に住む智者に、少しばかり汚れがついたつてかまわないのさ、そんな汚れはちつとも邪魔にならない。お月様にだつて暗いシミのようなところがたしかにあるが、照らす光の邪魔にはならない」

〔得智の後の仕事——人の為に教える〕

「人によつては智識を得た後に、人びとを導くために何かを仕事をする。ジャナカ王やナーラダのよう<sup>う</sup>にね。人を導くには力がある。古代のリシタたちは自分のためだけに悟りをもとめて歩いたがね。ナー

ラダやジャナカたちは勇気のある人たちだ。

つまらない木こつ端はは、河に浮いていても鳥の一羽も止まれば沈んでしまう。大きな丸太なら、牛や人間や象みたいなものまで上に乗せても平気だ。汽船は自分も向う岸に渡るが、どれだけ大ぜいの人をのせてくれることか。

ナーラダたちのような教師アイチャーリヤは太い長い丸太——汽船のようなもの。

何か食べたあと、口もとをきれいにタオルで拭いて知らん顔してすましている人がある。食べたことを他人に知られたくないから——（一同笑う）。マンガーが一つ手に入ったら、いくつにも切つて皆に分けてやって自分も食べる人もある。

ナーラダたちは人びとの幸福をねが希つて、智識を獲た後も、信仰を保もちながら人びとを相手に暮らしていた」

ジニヤナ  
智慧のヨーガと信仰バクテイのヨーガ——この時代ユガについて

医師「智識を得て人は感動し、目を閉じ涙をしたたせませます。そのとき信仰が必要となるのです」  
聖ラーマクリシュナ「信仰は女の人みたいに、奥の部屋まで入れる。智識の方は外側の部屋までさ」  
（一同笑う）

医師「しかし、女なら誰でも奥の間まで入れるわけではありませんよ。たとえば売春婦などは……。やはり智識が必要です」

聖ラーマクリシュナ「正しい道を知らなくても、神を信仰し、神を知りたいという希ねがいがあれば——こういう人は信仰の力だけで神をつかむんだよ。

一人の信心深い人がジャガンナートに参詣に行こうとして出かけた。プリーはどっちの方にあるのか知らなかった。だから南の方へ行かずに西の方に歩いて行った。道を間違えたわけだが、でも熱心に人にきいた。彼等は、『こつちじゃない、あの道をお行きなさい』と教えてくれた。信心深い人はついにプリーに着いて、ジャガンナート寺にお参りした。ね、たとえ知らなくても、誰かが教えてくれるものだよ」

医師「でも、しかし、道を間違えて歩き出したのです」

聖ラーマクリシュナ「うん、まあそういうこともあるのはたしかだがね。でも結局は、目的を果たした」

一人の信者が、「神は形があるのですか？ それとも無性無形のものなのでしょうか？」と質問した。聖ラーマクリシュナ「あの御方は形があつて、しかも形がない。

一人の出家がジャガンナートにお参りした。お参りしてから心に疑問が生じた。——『いつたい、神には形があるのがホントウか、それとも形のないのがホントウか？』ちようど手に杖つえを持っていたので、それで試してみることにした。ホントウに神がそこにいるのかどうかをね。——杖が神像にさわれば形があり、さわらなければ形がないのだろうと。はじめ、杖をこちら側からあちら側に(神像のあるところに)動かしてみたら、全然神像にさわらなかつた。——そうか、やはり神カウシの形は、ホントウ

は無いのか！ それから、あちら側からこちら側に杖を動かしたら、こんどは杖は神像にあたった。そこで出家は悟ったというよ、神は有形サイカシでもあり、無形ニライカシでもある、と。

しかし、このことを理解するのは大へんな力がある。形のない御方がどんなわけで形を表すのか？ この疑問が起るわけだよ。しかも、形をとるにしても、どうしていろいろさまざま相すがたになるんだろう？」

医師「神はこの世界にこれほど多くの形を創造なさいました。ですから、ご自身も形を持っていらっしゃるのです。また神は、目に見えぬ心ココロも創造なさいました。故に、無形でもあるのです。神はあらゆるものになることができます」

聖ラーマクリシュナ「神をつかまないうちは、こういうことははっきり理解できないよ。求道者のために、あの御方はいろいろな姿で、いろいろな方法で現れて下さるんだよ。ある人が染粉そめこを溶かした桶おけを持っていた。多くの人がその人のところに衣類を染めてもらいに来た。その人はいつも、『あなた、どんな色に染めたい？』と聞くのだった。誰かが、『私は赤い色に染めたい』と言えば、すぐその人は染桶に入れて注文の色に染め上げ言った。『さあ持つて行って下さい。赤い色に染まった下衣カボルを——』また別の人が黄色に染めたいと言えば、すぐその人は同じ染桶に入れて、『さあ黄色に染まったよ。持つて行って下さい』と言う。青い色に染めてくれと頼まれると、やはりその同じ桶に入れて、『さあ青い色に染まったカボルを持つてお行き』と言う。そんなふうにして、どんな色でも来た人の注文通りの色に、その同じ一つの染桶のなかで染めてくれるのだった。そこである人が、そ



のことを実に不思議だと思つていた。——一体、どんな色の染料が溶かしてあるのだらう？　そこで染めに行つたとき、『さあ、どうする！　あんたのは何色に染めたらいいのかね？』と聞かれたとき、『バーイ(兄弟)！　あんたの桶のなかに入つている染粉の色に染めてほしいんだ！』と言つて注文したとき(一同笑う)。

ある人が小用を足しに行つて、ヒヨイとそばの樹の上を見上げると美しい生き物が枝のところに行った。あとですぐ仲間に知らせた。『バーイ(兄弟)！　○○の樹の上にきれいな赤い色した生き物がいたよ。見てき給え』すると仲間の一人は、『私も見たよ。だが、どうして赤い色だといふのかな？　あれは緑色の生き物だ』また別の人は、『いやいや、緑色の筈がない。あれは黄色だよ！』また、いや、そうじゃなかった、紫だ、青だ、黒だ、という言い合いになつた。そこで、皆でその樹のところに行つてみると、樹の下に坐つている人がある。皆はその人に訊いてみた。すると、『私はこの樹の下に住んでいる者ですがね、あの生き物のことならよく知つている。あんたが言うことは全部ほんとは。あれは赤い色になるときあるし、緑色になるときもあるし、時には黄色にも青にも、どんな色でもなるんですよ。それに無色のときだつてあるんですよ！』

いつもいつも神を想つている人は、あの御方の實際ほんとうの性質がわかるようになる。そういう人は、神がいろいろな相すがたをみせて下さることを知つている。さまざま方法で現れて下さることも知つている。あの御方は一切の性質をもち、また無性でもある。樹の下にいつも住んでいる人は、カメレオンがいろいろな色になつたり、時には透き通つて無色になつたりすることを知つている。事実を知らないほ

かの人たちは、ただ、ああだ、こうだと議論したり、ケンカしたりしているんだよ。

あの御方は形が無いし、また形もある。どんなふうなものなのかわかるかい？ サッチダーナンドは果てしない大海のようなもの。信仰の冷やす力で、ところどころに氷ができています。水が氷の形に固まっている。つまり、信仰者のためにあの御方は形をとって現れて下さるんだよ。そして又、智識の太陽が上ればその氷は溶けてしまう」

医師「太陽が上れば氷は溶けて水に戻ります。それからまた、水は蒸発して形のない水蒸気にもなりますね？」

聖ラーマクリシュナ「つまり、ブラフマンのみ真実、世界は虚偽まぼろしと分別ヴァイチャールのきわまったところで三昧に入ると、形や相すがたは蒸発してしまう、ということさ。そうになると、もう神を、人格(Person)として感じられなくなる。あの御方はどんなものか、口では言えなくなる。いったい誰が言うんだい？ 言うべき御方もいなくなったんだから——その御方の、私は、どこを探したって無い。そのときブラフマンは無性ニルグダ(属性なきもの)——絶対(Absolute)だ。その場合、あの御方はただ、感得ボレ、ボドすること出来るだけだ。普通の心や知性では、あの御方は理解できない(Unknown and Unknowable)。

(訳注1) ボーデ・ボドとはベンガル語で、分かるものは分かる、といったような意味で、別の言葉で言えば、感得シッダ——純粹な知性による直感的な感知のことである。一八八二年八月二十四日の不滅アムリトの言葉の中でタクルが、成就者シッダについての説明として、真つ暗な部屋で手探りで主人を探すたと嘘として語ってくれているので参照願いたい。

だから、言うんだよ。信仰は月、智識は太陽だと。聞くところによると、うーんと北と南の方には海があるそうだね。そこはとても寒いので、海の水がでかい塊になっちゃまっている。汽船も通れない。水が邪魔になって先に行けないんだとさ」

医師「ですから、信仰の道に進むと、障害物にぶつかるといふことです」

聖ラーマクリシュナ「うん、まあ、それもそうだが、別に害にはならないんだよ。だって、サッチダーナンダの海の水が氷になったんだもの。もし、もつと考えたかったら、もつと、ブラフマンのみに実在、世界は虚仮ウツと考えつづけていたかったら、そうしてもいいんだよ。智識の太陽で氷が溶けていくだろう。あのサッチダーナンダの海に溶けてしまふんだよ」

「未熟な私」と熟した私——信者の私と子供の私」

「分別判断の極まったところで三昧に入ると、オレもワタシもなくなる。でも三昧に入るとはとつともなく難しいんだよ。このワタシシというやつは、どうにもこうにも追ん出て行かないんだ。追ん出せないものだから、また何度も何度もこの世に生まれて来るんだよ。

ごらん、牛はハムバー、ハムバー(わたし、わたし)と啼なくからどんなに苦勞するか！ 一日中スキにつながれて——降つても照つてもさ！ そうでなければ、肉屋に売られて切られてしまう。それでお終しまいじゃない、皮はナメされて靴に作られる。さいごに血管や腸が糸梳すき用のヒモになる。そして糸梳すき職人の手で使われると、トゥフ、トゥフ(あなた、あなた)と音をたてるようになって、やつとこ

れで解放される。

人が、ナハン、ナハン(私じゃない、私じゃない)——つまり、ワタシなんてものはない、おお、神さま、あなただけ、あなただけがすべてをなさる、あなたがご主人で私は召使い——と、こう思うようになると、すっかり楽になる。それが解脱なんだ」

医師「しかし、糸梳すき職人に使われなけりやなりません」(一同大笑)

聖ラーマクリシユナ「どうしても私が出ていかないなら、そいつを神さまに雇ってもらって召使いの私ににしまうんだ(一同大笑)。

三昧のあとでも、私をを残しておく人もある。——召使いの私か、信者の私をね。シャンカラ大アチャーリヤ師の場合は人びとを導くために、明知の私をを残しておくなすった。この召使いの私か、明知の私か、信者の私をを成熟した私というんだよ。じゃ、未熟の私は？ それはね、私が主人だ、命令者だ、私は金持ちの息子なんだ、私は教育があるんだ、私は財産を持っている、この私にそんなことを言うなんて！——こういう私のこと。もし誰かの家に泥棒が入って物を盗む。しかしこのドロボーが捕まえられたならば、盗んだものは全て取り上げられて、その後で、これでもか、これでもかとばかり殴られる。そしておまわりに引き渡される。そのとき家の主人は、「バカめ！ ここを誰の家だと思っているんだ！」と罵ののる。

神をつかむと五つの子供のような様子になる。子供の私も成熟した私だ。子供はどのグナの支配もうけない。三トリグナを超越している。サットヴァ性にも、ラジャス性にも、タマス性にも支配され

ない。見なさい、子供はタマスに支配されないから、今しがた小さなコブシをふり上げて殴り合いま  
でしていた相手と、もう抱き合つて仲良く遊んでいる。ラジャスにも支配されない。今、一生懸命に  
なつてあれこれ工夫してオモチャの家をつくつていたかと思うと、もうあっさりこわしてしまつて母  
さんのところに飛んでいく。こんどはキレイな服を着て意気揚々と歩いている。少したつと、何を思つ  
たかみんな脱いでしまつてポイと捨てる。キレイな服のことはすっかり忘れてしまふ。——まあ、ど  
うかすると服を小脇にかかえてブラついていることもあるがね、ハハハ……。

もし子供に、『いい衣服だね、誰の服だろうね?』と聞けば、『ボクのだよ、お父さんがくれたの』  
と答える。もし、『お利口な坊やだね、その服、おじさんにくれないかい?』と言えば、『いやだ、ボ  
クのだもん、お父さんがくれたんだもん。ボクやらないよ』——そのあとで、おじさんがちよつとし  
た人形とか竹笛のようなものを手に持たせてだませば、五ルビーもする服をさつさと脱いで渡し、あつ  
ちへ行つてしまふ。それから五才くらいの子供は、サットヴァにも支配されない。隣近所の遊び仲間  
と大の仲良しで、一日も会わないではいられぬほどだったのに、父さん母さんといつしよに別な土地  
に移り住めば、すぐそこで新しい遊び仲間ができる。そして仲良しになる。以前の遊び友だちのこと  
はすっかり忘れてしまふ。それからカーストの誇りなどもない。母親がある男の人のことを、『これ  
はお前のお兄さんですよ』と言えば、十六アナ(10%)、この人は自分の兄さんだと思ひ込む。バラモ  
ンの子も鍛冶屋の子も、仲よく同じ皿からご飯を食べる。それから、清浄だとか不浄だとかいふ観念  
もない、世の中の習慣なんかにとらわれない。お尻を洗つた後、誰かれかまわずヒョイと尻をつきだ

して、『ネ、きれいになつてるかい?』なぞと聞く。

それから、年寄りの私レというのものもある(医師笑う)。年寄りにはいろんな枷かせがある。カースト、誇り、恥、憎しみ、恐れ、世俗の知恵、勘定高いこと、人をだますこと。もし誰かに対して腹を立てたら、それがなかなか忘れられない。ことによると一生忘れることができない。それから、学識自慢と財産自慢もある。こういう年寄りの私レは未熟な私だよ」

〔真理を得られない人〕

「(医師に向かつて)——四つ、五つの種類の人は真智を得ることができない。知識をひけらかす人、学歴を鼻にかける人、財産を自慢する人、こういう人たちは真の智識を得ることは不可能だ。こういう人たちに誰かが、『どこそこに立派なサードゥがいるそうだから、会いにいきませんか?』と言うと、すぐさまいろんな口実をつくって行こうとしない。内心こう思っているんだよ——『この私が、何のためにサードゥなんかに会いに行く?』」

〔三よりグナ——サットヴァ性で神をつかむ——感覚器官を抑制する方法〕

「タマス性しるの特徴しるが我執マハジャナだ。我執は無智から、タマス性から出てくる。

プラーナにある話だが、ラーヴァナはラジャス性、クムバカルナはタマス性、ヴィビーシャナ(実証)はサットヴァ性を表している。だからヴィビーシャナがラーマをつかんだんだよ。タマス性のもう一つの徴しる

しは怒りだ。怒りは正しい方向感覚を失わせる。ハヌマーン(訳註)は怒りにまかせてランカーを燃やしてしまつた。シーターの住んでいる小屋もいっしょに燃えることに、気が回らなかつたんだよ！

それから、もう一つのタマス性の徴しるしは——情欲だ。パトゥリアガートのギリンドラ・ゴージュが言っていたがね、情欲、怒りなどの敵リフをどうしても追い出せなかつたら、そいつらを方向転換させろ。神に情欲を燃やせ。サッチダーナンダと情交しろ。どうしても怒りが抑えられないのなら、タマスの信仰に変えろ。「何？ おれはドウルガーの名を唱えているんだ、救われない筈があるものか！ 今さら罪などに何の関係がある？ 束縛が何だ？ 今さら何に束縛されるといふのだ？」といふふうだ。それから、神をつかもうとしてうんと欲をかけ。神の美しさに無我夢中になれ。私は神の召使い、私は神の子供と思つて——。もし自慢がしたければ、そのことを自慢しろ。こういうふうにして六つの敵の力を方向転換することだ、と」(訳註、六つの敵——六情リフ＝色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着のこと、六人の仲間とも言う)

医師「感覚器官を抑制するには非常な力がいります。暴れ馬の目には目隠しかぐをする必要があるのです。時には全く見えないほど、すっかり目隠ししなくてはならないのです」

聖ラーマクリシュナ「いちどあの御方の恵みをいただいたら、いちどあの御方に会えたら、アートマンにいちどでも対面できたら、あとはなーんの心配もいらぬ。——六つの敵だつて、その人をどうしようもないんだ。

ナーラダやブラフラーダのようなニチヤンツダ永遠完成者ニチヤンツダとよばれる偉大な人たちは、目隠し布をあてるな

どという面倒なことをする必要がある。自分で父親の手をつかんでアゼ道を歩いている子供は、時には手を放して溝に落っこちる場合もある。だが、父親が子供の手をにぎっているときは、決して落ちることはない」

医師「しかし、父親が子供の手をつかんでいるというのは、どうも感心しません」

(訳註2) ラーヴァアナ、クムバカルナ、ヴィビーシャナ——ラーヴァアナはラーマの妻シーターを自分のものにしてしようと誘拐した邪悪な魔王。きびしい苦行によって神々や悪魔に決して敗れることのない力を身につけたが、ラーマによって倒された。クムバカルナはラーヴァアナの弟で、神々や人間に災いをもたらした罰として六ヶ月眠って一日だけ目を覚ます生活を送らされていた。ラーマとラーヴァアナの戦いではラーヴァアナの味方だったが、ラーマに倒された。ヴィビーシャナもラーヴァアナの弟で、きびしい苦行を行った結果、価値のない行為はせず、常に正しく生きるという恩恵を与えられた。兄ラーヴァアナがシーターを誘拐した時、兄の行為が正義に反するのでシーターの返還を提案したが、返ってラーヴァアナの怒りがあったので、ヴィビーシャナは兄を見捨てラーマの軍に加わった。ラーヴァアナが滅んだあとラーマの助けによりランカー(スリランカ)の王になった。

(訳註3) ラーヴァアナに誘拐されたシーターを探しに海を飛び越えてランカーに渡ったハヌマーンは、シーターに会ってラーマが助けにくてくれることを伝える。その後、ハヌマーンはラーヴァアナのことを探るために会って話をしようとしてわざと捕まる。ラーヴァアナは見せしめのためにハヌマーンの尻尾に火を付けてランカーの市街を引き回すが、ハヌマーンは身体を小さくして縛られた縄つなから抜け出し、怒りに理性を失って、尻尾しっぽに火が付いたまま飛び回ってランカーを焼き尽くしてしまう。焼け落ちたランカーを見て我に返ったハヌマーンは、きっとシーターも焼いてしまったに違いないと後悔し、命を絶とうとまで考える。



聖ラーマクリシュナ「どうしてさ。偉大な魂は子供のような性格なんだよ。神の前ではいつも子供なんだ。我執高慢は一切ないんだよ。あの人たちの力はすべて神の力、前のたとえで言えば父親の力なんだ。自分のものとか力とかいうものは何もないんだよ。これがあの人たちのはっきりした信念なんだ」

〔分別ヴァイチャールの道アーユルダ——智慧ジュニヤナのヨーガと信仰バクティのヨーガ〕

医師「先ず馬の目に目隠し布めかくをあてなかつたら、まっすぐ進ませることはできないでしょう？ 悪しき熱情おどを抑おさえなかつたら、どうして神さとしを覚さとることができませんか？」

聖ラーマクリシュナ「あんたの言ことつてるようなのを分別ヴァイチャールの道アーユルダというんだよ——智慧ジュニヤナのヨーガアーユルダと言ことうんだ。その道みちを通とおつても神かみのところところにゆける。智慧ジュニヤナの道みちを行いく人ひとたち——智者チットは先ず精神チットを清きよめよ、と説とく。先ず修行しゆぎんをせよ、そして智慧ジュニヤナを獲えよ、とね。

信仰バクティの道みちを通とおつてもあの御方ミカタのところところに行いける。神かみの蓮華れんげの御足ミタラシを信仰バクティして、あの御方ミカタの名なをとなえながら讃歌さんかをうたつたりするののに喜びよろこびを感じかんじるようようになれば、感覺器官かんかくくわんを抑おさえるために特別なこととくべなことをしなくてもいい。信仰バクティの力ちからで自然しぜんに悪感情あくかんじんが抑おさえられていく。

もし誰か、息子の死しにあつて嘆なげき悲かなしんでいるとすれば、その日ひにその人ひとは人ひととケンカなどできるかかね？ よその家いへからの招待しょうたいをうけてごちそうを食くべられるかかね？ 人前まへで威張いぢりちらしたり、快樂らくたつに耽ふけつたりできるできるだろうかかね？

蛾は一度光を見つけたら、二度と闇の方へは戻らないだろう？」

医師「ははは……。飛んで火に入り、焼け死ぬことも厭いといませぬね！」

聖ラーマクリシユナ「それとはちがうよ！ 神の信者は、蛾のように焼け死んだりしないよ。信者が見て飛び込む光は宝石の光のような光なんだ。宝石はなるほど光り輝きらいているが、その光は和やわらかく涼しい。入っても焼けるどころか、体も心も安らかになり、楽しくなるんだ！」

〔智識のヨーガは非常に困難〕

「分別の道、智識のヨーガを通してあの御方に触れることはできる。しかし、この道は大そう難儀だ。私は肉体ではない、心でもない。知覚フッヂイでもない。私には病気はない、悲しみもない、不安もない。私はサッチダーナンダそのもので、この世の苦楽から超越している。私は五感に支配されない。——こういうことを口で言うのは簡単だよ。しかし、ほんとうに身につけて実行するのは容易なことじゃない。手にトゲが刺さって血がダラダラ流れているのに、それでもトゲなんかどこにも刺さっていない、私はいたって快適だ、なんて言う。こんな風に言ってもいいものかい？ そんなことより、先ず、そのトゲを智識の火で焼き尽くさなけりゃ——」

〔書物からの智識または学問——タクルの教え方〕

「多くの人は、本を読まなければ智識や理解力が得られないものと思っている。だが、読むよりは人

から聞く方がよく、聞くより事実を見る方が優まさっている。カーシーのことについて本で読むことと、カーシーに行つてきた人から話を聞くことと、それから自分でカーシーに行つて見ることに、この三つの間にはずいぶん開きがある。

それから、将棋(訳註4)を指している本人たちより、傍はたで眺めてる人の方が得てして正しい駒の進め方がわかるものだ。世間の人は、よく自分のことを賢明だと思つてゐる場合があるが、ところがそうじゃない、世俗のものに執着している。いわば自分で将棋を指しているんだ。だから、駒の進め方が正しくわかつていない。だが、俗世を離れたサードゥは世間のことに執着がない。だから彼等は、世間にいる人よりずっと賢明だ。自分で将棋を指していないから、駒の動き——先がよく見えるんだよ」

医師「(信者たちに向かつて)——本を読んでいたら、この人物(訳註5)は大智識には達せられなかつたでしょう。ファラデー(訳註6)は自然と親しく交わつていました。ファラデーは大自然と靈交してました。だから、これほどの自然の真理を発見できたのです。本を読んで知識を得ていたのなら、あれほどの大発見はできなかつたと思ひますよ。数学の公式は頭を混乱させるだけで、独創的探求の道を大いに中断しがちですからね」

〔神から与えられた智慧——Divine wisdom and Book learning(神的智慧と読書)〕

聖ラーマクリシュナ「(医師に)——五聖樹(パルメチヤパテ)の柱で地面に体をたたきつけながらマーに折つたものだよ。『マー！ 祭式主義者が祭式を通じて得た真理を、ヨーギーがヨーガによつて得た真理を、

智者<sup>ジュニヤニ</sup>たちが哲学研究によって得た真理を、それより違ったものがあるならば、それをわたしに見せておくれ！』と言いながらね。それで、どれだけたくさんのことが起こったことか！

アー、なんと言いう経験をしたことか！ 眠りは去った！  
こうおっしゃってから、大覚者<sup>バウハシヤ、デレツ</sup>様は歌を口ずさまれた――

わが眠りは破られ、われ再び眠らず

ヨーガのなか、永遠に目覚めてあり

大実母はヨーガの眠り(三昧)を与えて

無明<sup>このよ</sup>の眠りを、やさしく眠らせ給う

わたしは本は何も読まなかった。でも、マーの名をとなえていたから皆が尊敬してくれた。シヤン

(訳註4) 将棋――原語はベンガル語でチョトロンチと言い、マス目の盤を使って駒を動かすゲームでチェスの原型と言われている。

(訳註5) ファラデー―マイケル・ファラデー (1791―1867)、イギリスの化学者・物理学者。無学であったが、二十歳のときハンフリー・デービー (不滅の言葉) 一八八五年十月十八日参照) の助手となり、その後、電磁誘導の法則や電気分解の法則などを発見した。信仰心が強く、神と自然との強い一体感が、彼の生涯と仕事に影響していると言われている。

ブー・マリックが言ったよ、『剣も楯も持つておられないが、このかたは偉大な英雄だ』と」(一同笑う)  
ギリシユ・ゴーシユのつくった戯曲、<sup>レ</sup>ブツダの生涯<sup>が</sup>話題になった。彼は医師を招待して、その芝居を見せた。医師はそれを見物して非常に感激し、喜んでいたのである。

医師「(ギリシユに)——君はほんとに悪い人だねえ! 私を毎日、劇場に通わせるつもりかい?」  
聖ラーマクリシユナ「(校長に)——何のこと話しているんだか、わたしにやさっぱりわからんよ」  
校長「先生は、ギリシユの芝居を大へん気に入っておられるですよ」

アヴァターラについて——アヴァターラとジーヴァ

聖ラーマクリシユナ「(イシヤンに)——お前、何かお言ひよ。この人(医者)はアヴァターラを認めないよ」とさ」

イシヤン「はあ、でも、今さらこういうこと議論などいたしても……。私はもう、あまり議論を好まなくなりました」

聖ラーマクリシユナ「(ムツとして)なぜだい? 正しいことを言うのもイヤになったのかい?」

イシヤン「(医師に)——我々は我執高慢が強いために、信じるのが薄いのです。むかし、ブシユンディーという名のカラスがいて、ラーマが神の化身であることを認めませんでした。そのカラスはラーマの支配力から逃げてみせようと思つて、月の世界から<sup>チンドラ・ロカ</sup>天国、<sup>デーヴァ・ロカ</sup>カイラスの山を越えて向こうまで飛んでいってみましたが、どうしてもラーマの掌の中から出ることができなかつた。それで彼は、

自分からラーマにつかまって庇護を乞うたのです。するとラーマは、そのカラスを手でつかんで口のところへもつていって呑みこみました。目を開けるとカラスは、樹の枝のもと古巣にとまっていたということでした。我執高慢がとれたあとで、カラスのプシユンディーはやっと理解できたのですよ。ラーマは一見、普通の人間と同じように見えるが、あの方の胃袋には大宇宙がおさまっているのだと。あの御方の胃袋には、大虚空も、アーカーシャ月も、チャンドラ太陽も、スライヤもろもろの星座も、大海も、河も、すべての人間や動物も、樹々や花々も、何もかも入っているのだと」

〔人間の有限な知性——Limited Power of the conditioned（条件付きの限られた力）〕

聖ラーマクリシュナ〔医師に〕——あの御方がスヴァラート（有限の人間）であり、また同時にヴィラート（宇宙に遍満する霊）でもある、ということを理解するには大へん力がある。ニティヤ（絶対永遠）である御方がリーラー（変化活動）なさるんだよ。あの御方は人間の姿にはなれないなどと断定することが、わたしらの貧弱な知性（理解力）で出来るものだろうか？ わたしらのごく限られた理解力で、こういうたことを全部理解することができると思ukai？ 一シーア（エリットル）の壺には、どうしたって四シーア（4リットル）の牛乳は入らないだろう？

だから、神をつかみなすったサードウやマハートマーの言いなさることを信じなけりゃいけないんだよ。あの方々はちょうど、弁護士が訴訟のことを年中考えているように、始終神さまのことばかり考えていなさるんだから——。あんたたちは、今のカラスのプシユンディーの話が信じられるかね？」

医師「自分で納得できるだけのことは信じます。降参してしまえばそれでお終しまい、そりゃ、何の悩みもなくならはしましょう。しかし、私としてはラーマが神の化身などと、どうしても信じられない。先(訳註)ずバリ(ヴァーリン)を殺したこと。——盗人みたいに木かげに身をかくしてバリを油断させ、そして殺してしまったのですよ。あれは人間のすること、神のすることではありません」

ギリシユ「先生(トビタ)、あれは神さまだけが出来ることだと思えますよ」

医師「それから、シーターを追放(訳註)したこと」

ギリシユ「先生、それだつて神だから出来たことですよ。人間にはできないことです」

〔サイエンスか?——大聖者の言葉か?〕

イシャン「(医師に)——あなたはなぜ、アヴァターラをお認めにならないのですか? 今、おっしゃったでしょう。神は形を有するが故に、様々の相形すがたをおつくりになった。また、神は無形なるが故に、心(目にみえぬ精神作用)をおつくりになった、と。つい今、おっしゃったではありませんか、神においてはあらゆる事が可能だと」

聖ラーマクリシユナ「アツハツハツハ、アハハ……。神は化身してこの世に現れることが可能である、なんていう文句は、この人たちのサイエンスの本には書いてないのさ! だもの、どうして信じられる?(一同大笑)」

まあ、話を一つお聞き。——ある人が友だちに言った——『大変だよ! ○○区で家が一軒ボンボ

ン燃えて焼け落ちるのを見てきた」友だちはイギリス式の教育を受けた人だった。『ちよつと待つてくれ、新聞を見てみるから——』といって、やおら新聞に隅から隅まで目を通した。火事のこととはどこにも出ていない。そこで友だちにこう言つたとさ——『君の言うことは信じられないね。だつて、

(訳註6) バリ(ヴァーリン)はキシユキングダー国の王様で、スグリーヴァの兄であつたが攻撃性が強く、敵を追いかけて洞窟に入ったまま出てこなかつた。兄が死んだと思つたスグリーヴァは民衆や大臣たちから王になるよう促されて即位する。洞窟から出てきたバリは激怒し、スグリーヴァを追放し、彼の妻まで奪つた。兄のバリを恐れつつも正義を貫こうとするスグリーヴァは山の上からラーマの姿を見つけ、ただならぬ御方と認め家臣のハヌマーンを使いやる。シーターの行方を捜していたラーマも、スグリーヴァの協力を得るよう助言を受けていたのだ。ラーマは事情を聞いてバリを倒すことを約束する。スグリーヴァは兄バリに決闘を挑み、二人が激しく闘っている最中にラーマが放つた矢に当たりバリは息絶える。瀕死の中でバリは、身を隠して矢を放つたラーマの非を問うたが、ラーマは、神々が王として人間の姿をとつて現れ、不正なことを犯した者に刑罰を与える。それに服した者は清浄となつて天国に行くのだ、と論じた。

(訳註7) シーターの追放——この話は『ラーマヤナ』からの引用。ランカー(スリランカ)の魔王ラーヴァナはラーマの後あとのシーターの美しさに惹かれ、自分のものになしようと誘拐するが、ラーマと弟のラクシュmanaはラーヴァナを倒しシーターを取り戻す。ラーマが、長い間誘拐されていたシーターの貞節を疑つたので、シーターは絶望のあまり、燃える炎のなかに入って死のうとするが、アグニ(火の神)によつてシーターの貞節は証明される。しかし、シーターの貞節を疑問に思ひ民衆が動揺したので、ラーマはシーターの潔白を知つていながら、民衆の不安を鎮めるためにシーターを追放した。



新聞にはそんなこと書いてないもの。君の見間違いだよ』(一同爆笑)

ギリシユ「(医師に)——あなたは、クリシユナが神であることは認めるでしょう。ただの人間だと言わせませんよ。デーモン・オア・ゴッド(悪魔か、もしくは神か)としなければなりません」(訳註——聖クリシユナの起こした人間の力を超えた数々の奇跡を踏まえた言葉)

〔無邪気と神信心〕

聖ラーマクリシユナ「無邪気でない人は、そう簡単に神が信じられないものだ。世間知のあるところからは、神は千里も遠いところにいなさる。俗知恵から、いろんな疑いやいろんな種類のホコリが出てくる。——学識ボコリとか、財産ボコリとかね。まあ、でもこの人(医者)は、無邪気なところがあるよ」

ギリシユ「(医師に)先生! いかがですか? 曲った心で智慧は獲られますでしょうか?」

医師「フン! 時よって出来ますよ!」

聖ラーマクリシユナ「ケーシャブ・センは無邪気な人だったねえ! いつか、あそこ(ラースマニの館ドゥルガシール)に来たとき、無料接待所に午すぎの四時ころ行ってみて、こう言うんだよ、——『えーと、いつ乞食に飯を施すのですか?』(その時間はとくに過ぎていた)

神への信心が増えるほど智識も深くなる。何のかのと選り好みこのして馬草マゲサを食べる牛はチビチビしか乳を出さない。草ッ葉でもモミガラでもワラでも、出されたものは何でもワサワサ食べる牛はドクドクと豊かに乳を出す(一同笑う)。

子供みたいに信じなければ、神に触れることはできない。母親が、『この人はお前の兄さんだよ』と言えば十六アナ(100%)、自分の兄さんだと信じ込む。母親が、『この部屋にはオバケがいるから入っちゃだめ!』と言うと十六アナ(100%)、この部屋にはオバケがいると信じ込む。こんなふうの子供のような信じ方をごらんになると、神さまはお慈悲を下さる。世間並みのことを考えていたんじや、神さまには触れないよ!」

医師「(信者たちに)——しかし、そんなふうにして飼<sup>か</sup>い葉<sup>ぼ</sup>を食わせて乳をたくさん出させるのはよくありませんよ。私のところでも一頭、そんなふうな飼<sup>か</sup>い方<sup>ぼ</sup>をしていましたら、しまいに私はひどい病気になるましてね、何が原因だろう? とよく考えてみました。さんざ調べてみた結果、その牛のミルクが原因であると結論せざるを得ませんでしたよ! すっかり健康を害してしまつて、ラクナウ(インド北部)へ転地療養に行かなければならなかつた。あれこれ計算すると、一万二千ルピーほどの損害でした! (一同爆笑)

何が原因でどうなる、ということとはとてもハッキリ言明できることではない。パイクパラ(高級住宅地の一つ)で七ヶ月になる女の子が病気になるつて——百日ゼキでしたが、私が診察に行きました。どうしても病因がつかめませんでした。最後にこれが原因らしいとわかつたことは、ロバが雨でズブ濡れになつて、そのロバの乳をその子に飲ませていた、ということ——」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ「やーれ、やれ! じゃ、わたしが馬車にのつてタマリンドの樹の下を通ると、口がスッぱくなるのと同じ理屈かい!」(一同笑う)

医師「アハハハ……。まだありますよ。船長がひどい頭痛を訴えた。すると船医は汽船のどてッ腹に膏薬こうやくを貼ったそうです」（一同笑う）

〔サードゥと交わること、および感覺欲を捨てること〕

聖ラーマクリシュナ「（医師に）——いつもサードゥと関わりを持つてることが大事だいじなんだ。病気は慢性になってきているんだからね。サードゥたちが教えてくれることを実行しなけりゃいけない。ただ話を聞いているだけじゃどうにもなるまい？ 薬を飲むことも大事だが、食事にうんと注意しなけりゃ。どうしても食事療法が必要だ」

医師「その食事療法ということが、一番肝心なのです」

聖ラーマクリシュナ「医者に三通りある。上医と中医と下医だ。医者が来て脈をみて薬を渡し、『これを飲みなさい』と言って帰る。下医は、それから病人が薬を飲んだがどうか聞きもしない。中医は、病人をなだめたりすかしたりして服薬の必要なことを説明する。『さあ、この薬を飲まないと治らないよ。私があんたの病気に一番いいようにこの薬を処方したんですよ』と言ってね。もし病人がどうしても薬を飲まないのを見て、胸ぐらをヒザで抑おさえつけて、ぶん殴ぶちうつてでも無理矢理飲ませる。こういう医者が上医だ」

医師「胸ぐらを抑えつけてまで、ムリに飲ませなくてもいい薬もありましてね。ホメオパシーのよ  
うな——」

聖ラーマクリシユナ「上医が患者の胸ぐらを抑えつけても、ちつとも心配ない。

医者と同じこと、教師にも三通りある。宗教上のことを教えても、その後の弟子の様子にちつとも注意しない。——これが下師だ。弟子のためを思つて何度も何度もいねいに教えて、内容を何とかして分からせようとし、愛情こめて導く。——これが中師。弟子がどうしても教えを守らないと見ると力尽くでも従<sup>つ</sup>いてこさせる。——これを上師というんだよ」

〔婦人とサンニヤーシン——サンニヤーシンのきびしい戒律〕

「(医師に向かつて)——サンニヤーシンは女と金をすつかり捨てる。婦人の絵を見てもいけない。女というものは何に似てるか知ってるかい？ うまい漬<sup>アイチヤール</sup>け物さ！ タマリンドの——。心で思つただけでツバがわいてくる。目の前に置いちゃどうしようもない。

でもこれは、あなた方の場合ではないよ——サンニヤーシンの場合だ。あなた方は女たちの間で暮らしていてもいいが、できるだけ女に執着しないことだ。そして時々、誰もいない静かな処へ行つて、ひとりで神を想うことだ。そこには誰も寄せつけちゃいけない！ 神に信心、信愛が持てるようになるば、おおかたは無執着になつてこの世に住めるようになる。一人か二人子供がきたら、夫婦は兄妹のようにして暮らすことだ。そしていつも神に祈るんだよ、どうぞ、肉欲に心が引かれませんですよ——。どうぞ、もう子供を生まなくてもすみますように——と」

ギリシユ「(医師に向かつて微笑<sup>ほほえ</sup>みながら)——さて先生、もうここに來られてから三、四時間も経

ちましたが——。あなたの患者さんをこんなに放っておいてもいいのですか？」

医師「あーあ、今さら医者だとか患者だとか！ パラマハンサのおかげですべてはパーになりましたよ！」（一同笑う）

聖ラーマクリシュナ「ね、カルマナーシャ（活動の終わり）という河があるんだよ。その河に入るのは大そう危険なんだ。そこに入るとカルマナーシャになってしまふ——その人は二度と再び、どんな仕事もできないんだよ」（医師はじめ一同笑う）

医師「校長、ギリシユはじめ、他の信者たちに向かって——皆さん、私はあなた方の仲間に入りましたよ。医者としてそうしたほうが病人のためになるから——そういう考えからでは全くないのです！ もし身内の仲間だと思つて下さるなら、私はもうあなた方のものです」

聖ラーマクリシュナ「（医師に）——無条件アヘトツキ・バクテイの信仰といたよ。そういう信仰者は、こう言つて祈るんだ——『神さま！ 私は財産も名誉も、快樂や幸福も何も要りません！ ただ、あなたの蓮華の御足に清い信仰が持てますように——』と」

医師「はい……。カーリーの神像の前で人びとが祈っているのを見ると——内心は欲だけですね。——仕事を見つけて下さい、病気を治して下さいとか、そのほかいろいろ……。

（タクールに向かつて）——病気になったのですから、人と話をなすつてはいけません。ただし、私  
が来た場合は、私とだけ話をして下さい」（一同大笑）

聖ラーマクリシユナ「この病気を治しておくれ。あの御方の名前を称えたり讃歌をうたつたりできないもの」

医師「ディヤキナ瞑想するだけでいいではありませんか」

聖ラーマクリシユナ「あんなこと言つて！ わたしが一本調子のことばかりで満足すると思つてるのかい？ わたしはいろんなふう料理して魚を食べたいんだよ。汁煮にしたり、カレーに入れたり、酢漬けにしたり、油で揚げたりしてさ！ わたしは（あの御方を）礼拝（アージャ）したり、称名（ジャバ）したり、（ディヤキナ）瞑想したり、讃歌をうたつたり、御名を唱えながら踊つたり、いろんなやり方であの御方を味わいたいのさ」

医師「私も同感です」

「アヴァターラを信じないことは誤りか？」

聖ラーマクリシユナ「あなたの息子のアムリタはアヴァターラを信じない。ちつともかまわないさ。神は無形だと信じていても神にふれることができるよ。もちろん、形ある神を信じていてもあの御方にふれることができる。あの御方を信じることに任せること、この二つが必要なんだ。人間はもともと無智なものだし、間違いをするものなんだ。一シア（エリットル）の水かめに四シア（4リットル）の牛乳が入れられやしないんだ。それぞれのまわり合わせで、どんな道でもいいから一生懸命になつてあの御方に呼びかけることだよ。あの御方はわたしらの魂の奥に宿っていなさる導き手なんだから、心の底から呼びかければ必ず聞いて下さるとも。一生懸命に、形ある神を信じる道でもいい、無形の

神を信じる道でもいい、とにかく誠を込めて祈っていれば、きっとあの御方をつかむことができるよ。砂糖のころもがかかっているロティは、正面からかぶりついても、横つちよからかじつても、ちやんと甘い味がするからね。あなたの息子のアムリタはとて面白い青年だ」(訳註、ロティ——小麦粉をこねて伸ばして焼いたものでチャパティと同等のもの)

医師「彼はあなたの弟子です」

聖ラーマクリシュナ「(医師に向かつて)——ハハハ……、わたしに弟子はいないよ。わたしが皆の弟子なんだ！ みんな神さまの息子、みんなが神さまの召使いなんだ。わたしも神さまの息子で、わたしも神さまの召使いだ。

月の叔父おじさんはみんなの叔父さん——」

そこに居合わせた人はみな、心から喜んで笑っていた。

(訳註8) 月の叔父おじさん——ベンガル地方では母親の兄弟は甥おにや姪おめをととても可愛がり優しく甘えられる存在で甥や姪に対して影響力が強い。月も人に対して優しく影響力も強いので、母親方の叔父さんは月に譬たとえられる。